

的ケア』『緩和ケア』二二―二三、二〇一二年、二二―二六頁。

(21) <http://sankei.jp.msn.com/life/news/120118/trf1201181150005-a1.htm>より引用。

(22) 岡部健「一人ひとりの魂をおもひ、そして看取る」『あけぼの』二〇一二年一月。

(23) 本稿脱稿後に出版された佐々木宏幹『生活仏教の民俗誌』（春秋社、二〇一二）に、気仙沼、釜石、石巻などの「幽霊ばなし」と僧侶の果たし得る役割について論じられている。

(24) また別の記事で、「悲惨な死に直面し、生き残った方々がそんな思いをするのは当然のことです」と述べるのは森脇妙紀（高野山真言宗・金石教会・駒木不動寺）である。北村敏泰「いのち寄り添う」（一九）『中外日報』二〇一二年一月一日号。

(25) 遺体が見つかったくない家族の悲嘆感情は複雑であり、特別な配慮と対応が必要であるとされる。『あいまいな喪失とトラウマからの回復（仮）』中島聡美・石井千賀子監訳、二〇一三年（予定）、誠信書房（Pauline Boss, *Loss, Trauma, and Resilience: Therapeutic Work with Ambiguous Loss*, W. W. Norton & Company, 2006.）

(26) 池上良正『死者の救済史』角川書店、二〇〇三年、二〇

頁。
(27) 奥野修司氏による報告。奥野前掲『看取り先生の遺言』、二二四頁。

(28) 鈴木岩弓氏のご教示による。

(29) もちろん、たとえば家族関係が「心霊現象」の原因であるならばその問題に向かうのであれば根本的な解決につながるという批判、さらには宗教が問題の本質から目をそらさせてかえって事態を悪化させかねないという批判も可能であろう。しかし本文に述べた通り、ここでは、現に「心霊現象」で苦しんでいると訴える人々がおり、それを放ってはおけないと手を差し伸べている宗教者がいるという事実、そして、それが一定の心理的効果をもたらしているという事実が考察の焦点である。

(30) 鈴木岩弓「宗教的職能者と民俗信仰」宮本袈裟雄・谷口貢編『日本の民俗信仰』八千代出版、二〇〇九年。

(31) 佐々木宏幹『（ほとけ）と力』吉川弘文館、二〇一二年。
(32) 実践宗教学寄附講座主催、第一回臨床宗教師研修における講義「カフェデモンク」より。

震災を語り継ぐ

語り継ぐこと、記憶を保存すること

すべてが破壊されたまちで

東日本大震災が、どれほど多くの尊い人命を奪い、家屋や施設を破壊したか。被害の大きさをここでくり返す必要はあるまい。私がここでとりあげたいのは、被災したひとりひとりの心のなかにあるさまざまな経験であり記憶である。

しかし、それらについて触れようと思えば、客観的な観察者であることはできない。そうした経験を共に追体験しようという気持ちのない人間に対して、彼らが心を開いてくれることはないからだ。

であれば、私がどのようにして被災地に行くことにな

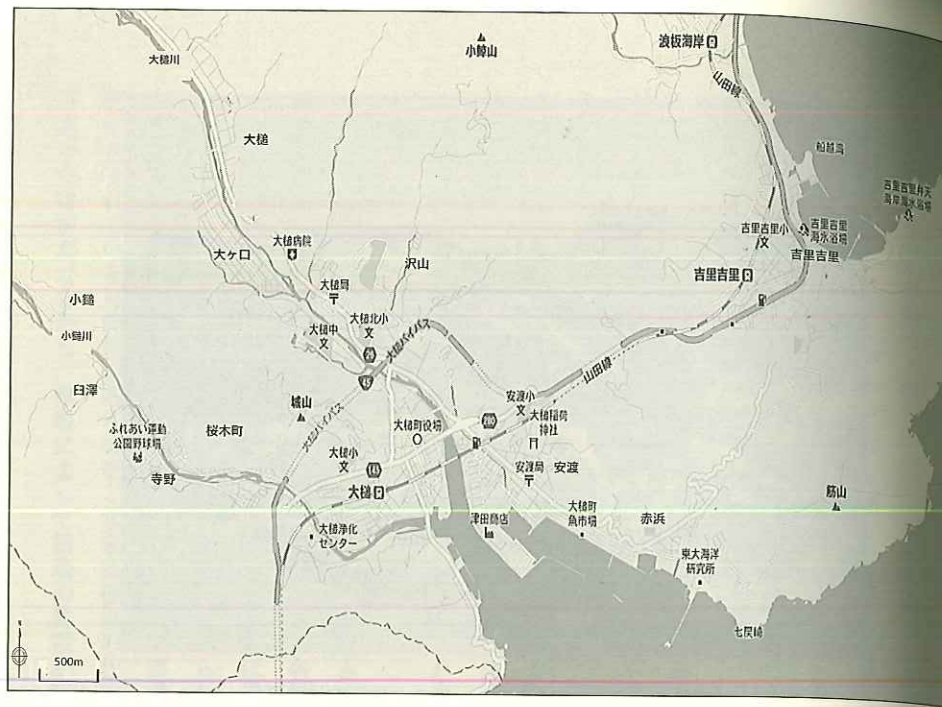
たけざわ しょういちろう

竹沢尚一郎

ったのか。そして、どのようにして現地の人びとと接していったのか。それから語り始めることが必要だろう。

震災と津波がもたらした被害の映像を見たときから、私たち親子三人はその衝撃に打ちのめされて、何にも手のつかない日々がつづいていた。地震から二週間経過しても被災地の復旧が少しも進んでいないことを知ったとき、私たちは話し合って被災地の支援に行くことを決めた。研究というより、ボランティアとして現地の人びとの生活の復旧を支援したいと思ったのだ。そう決めたとき、気持ちがフツと軽くなったことを今も鮮明に覚えている。

とはいっても、被災地ではガソリンが入手できないこ



「大槌 4月10日」 大槌町は津波とその後生じた火災によって完全に破壊された

とを知らされていた。四月の上旬になり、ようやくガソリンの入手が現地でも可能になったと知ったとき、私たちは被災地に向けて出発した。どこでも寝られるよう、車にテントと寝袋、食料などを積んで、京都の自宅を出たのだった。

私たちが岩手県に入ったのが二〇一一年の四月八日。四月とはいえ、雪のちらつく寒い日であった。そのときから、被災後一年半を経過した二〇一二年の九月一日までの約半分、合わせて八ヶ月を、私たちは岩手県上閉伊郡大槌町を中心に、となりの釜石市や山田町で過ごすことになったのだった。

とはいっても、最初から大槌町に行こうと決めていたわけではなかった。どこに行こうかと考えたとき、宮城県下の市町村では被災直後から多くのボランティアが入って、支援活動をおこなっていることがわかっていった。それで岩手県に入ろうと思ったのだが、インターネットで調べると、岩手県下の市町村のほとんどはボランティアを受け入れていなかった。そのなかでは、岩手県上閉伊郡大槌町だけは外部のボランティアに対して開かれた唯一

の市町村であった。津波によって町長が亡くなり、役場が破壊され、警察署も消防署も医療機関も商店街も無くなるなど、すべての機能を喪失した大槌町は、おそらくそれを断る余裕もなかったのだ。

高速道路の北陸道から東北自動車道にまわり、花巻で高速をおりて、遠野、釜石へと車を走らせる。そこまでは、道路の陥没や崩壊を知らせる警告板が出ているほかは、変わらない日常がつづいているように見えた。しかし、その先はともことばになるものではなかった。テレビや新聞のニュースで知っていたつもりだったが、JRの釜石駅から先で目にしたのは、予想をはるかに上回る惨状であった。信号はすべて失われ、道路の両側には家々のがれきや破壊された車がうず高く積み上げられ、鉄筋建造物をのぞいてすべてがなくなっている。しかも、わずかに残った鉄筋の建物さえ、壁は大きく破れ黒く焦げて、火災の刻印が深く残されていたのだった。

道はいたるところで陥没したり舗装が剥けており、標識も信号もない土地を走らせるうちに心細さは増すばかりだった。何も勝手がわからないままに、インターネット